

列点記号を刻した土師器

平城京左京二条大路SD5100から出土した土師器の内面には、焼成後の刺突により列点記号が刻されています。外周と中心点を放射状の列点で結び、起点となる円周上の一点から5点目で次の起点にいたるといこの列点記号の特徴は、現代韓国の「ユンノリ」という双六に似た盤上遊戯の盤面と共通しています。

ユンノリは、現代日本の双六のようにサイコロではなく、かまぼこ形の断面形状を呈する4本の棒を使用し、その表・裏の組み合わせでコマを進める点に特徴があります。

このユンノリは、従来、万葉集研究者によって注目されていました。『万葉集』には「一伏三向」・「一伏三起」と書いて「ころ」、「三伏一向」と書いて「つく」と読ませる用字や、「切木四」・「折木四」と書いて「かり」と読ませる用字があり、これらはユンノリの4本の棒やその組み合わせに関連すると考えられています。

今回ご紹介している列点記号は、万葉集研究者によって奈良時代に存在が推定されていた、ユンノリに似た盤上遊戯の盤面の可能性が考えられます。

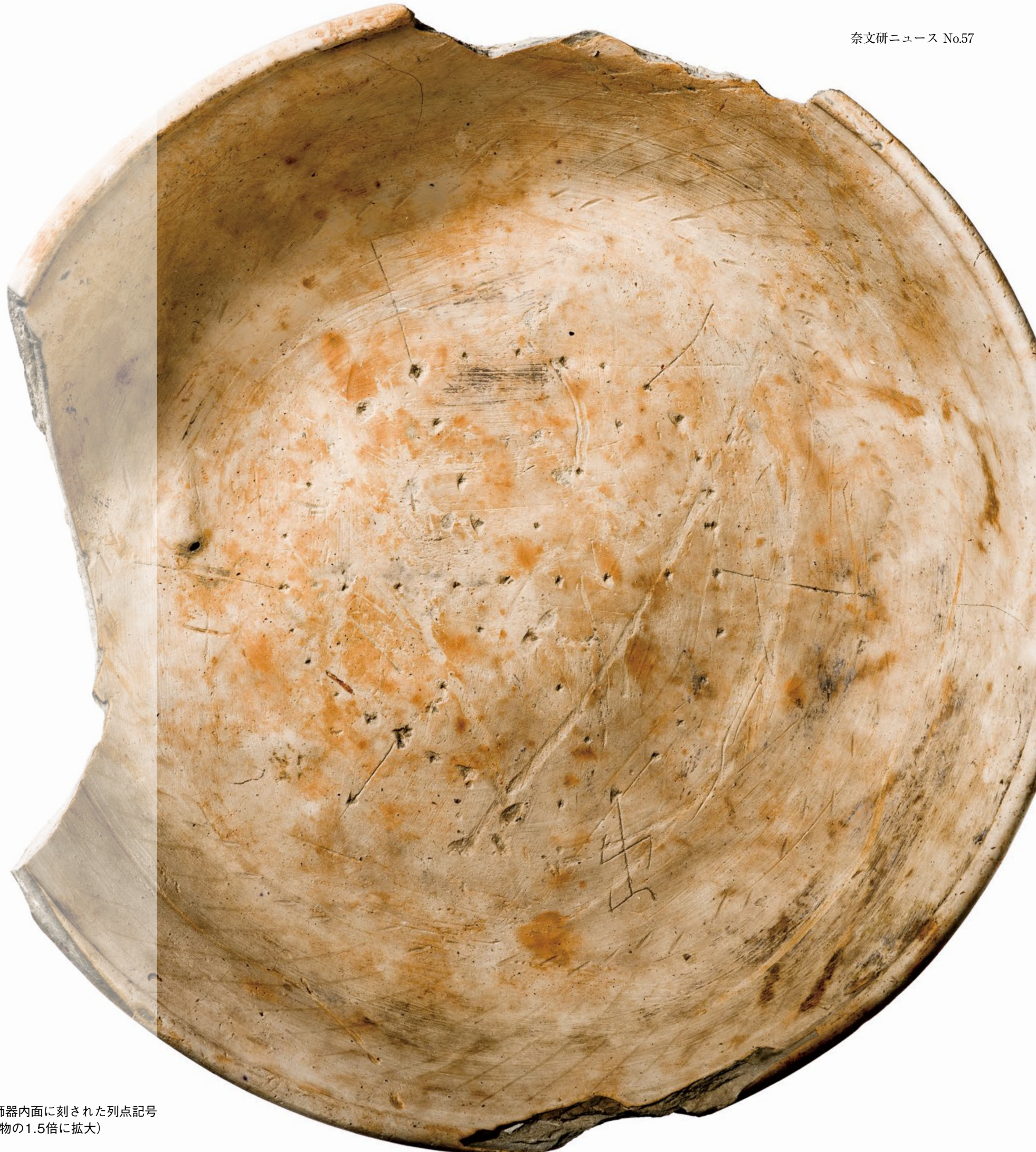
(都城発掘調査部 小田 裕樹)



二条大路 SD5100出土土師器



現代韓国のユンノリ (盤・駒・棒)



土師器内面に刻された列点記号
(実物の1.5倍に拡大)